

日本

ハンザキ研究所ニュース 2012(10) : 通巻 No. 82



発行 2012年10月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

秋・・・紅葉と落葉

今年の紅葉は見事であった。スギやヒノキの植林地帯にあって“全山燃える”ところまではいかないが、個々の木々を見ているとその色合いの違いもあって素晴らしい。毎年のことだが紅葉の仕方には違いがあるので校庭の木々を撮影して比べている。イチョウは十数本あるが一斉に黄金色になっては、ある日全ての葉が落ちるものの、木によってずれがある。その原因は分からないが日照の差があるようだ。毎年一番南にある木が早く葉を落とす。モミジの仲間は外側の良く日のあたる部分は綺麗に紅葉する。ドウダンツツジも場所によって日当たりの差があるので紅葉していく時間にずれができる。深紅から橙黄色まで色合いが違い、刈り込まないで伸びるに任せて楽しんでいる。ウルシやヌルデも鮮やかに紅葉するが、人との接触の多い場所のものは残念ながらカットしている。



紅葉

紅葉はあっという間に消える。少々強い風が吹くと雨あられとばかりに葉が降り注ぎ地面が一瞬だが紅葉する。モミジ葉を踏みしめて歩くのは気分爽快だが、室内に落ち葉が持ち込まれて再々掃き出さねばならない。また、ハンザキ・プールのオーバーフローのネットに張り付いて水の循環を悪くするのも困りものだ。さらにアンコ淵の観察もできなくなる。水面を落ち葉が覆うのだ。春のサクラの花びらや初夏に見られる謎の白い泡も同様だ。

淵の上流側に角材を浮かべて防ごうとしたが下流側のカーブで一部が反流してゴミや落ち葉が淵の水面に漂い集まってくる。これを解決したのが塩ビパイプの二重リング方式だ。あの輪は何ですか？と再々質問されるが、ここぞとばかりに自慢する。水面の波を消し、見事に落ち葉を阻んでアンコ淵の巣をモニターに映し出してくれるのだ。



写真1 アンコ淵の二重リング



写真2 ポンプ・ピットの落ち葉対策



写真3 ツリフネソウ

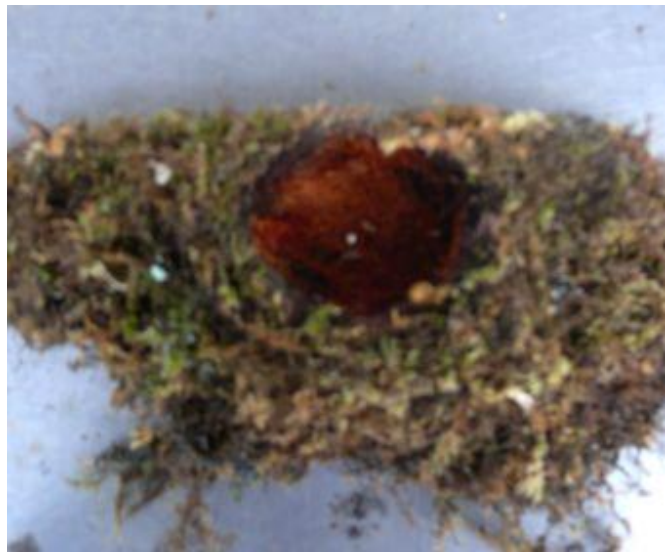


写真4 芸術的な小鳥の巣



写真5 クロコノマチョウ初確認

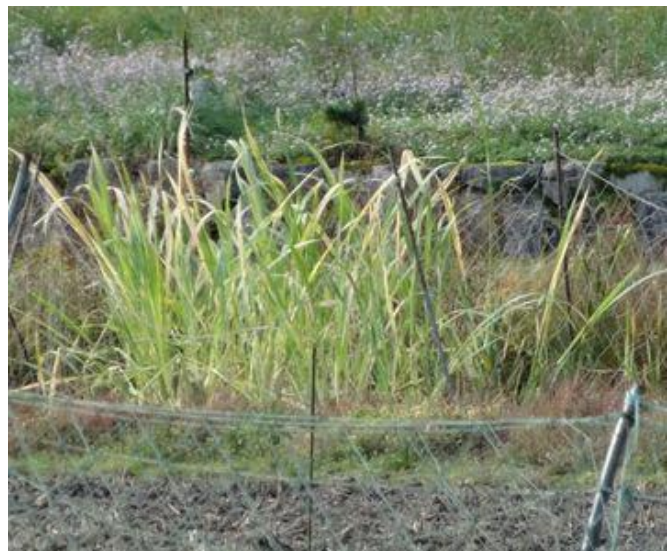


写真6 瀬戸市下半田川町からのマコモ



写真 7 マコモの囲いのネットに掛ったシカ



写真 8 シカに荒らされた大根畑



写真 9 シカにかじられた大根



写真 10 校庭を歩いていたイモリの幼体



写真 11 ついに捉えた離れザルのオス



写真 12 サルが食い捨てたクリ

生野銀山とオオカミ

研究員 池上優一

生野町を流れる市川は、上流域にかけてオオサンショウウオの多数生息地です。古のオオサンショウウオに興味があり、古名・地方名を古文獻から見つけるために、二年前から津山の「古文書研究会」で本格的に勉強を始めました。そのテキストに美作津山藩松平家の『国元日記』を使用しており、その中に「但馬の生野代官が津山周辺を巡村するにあたり、津山藩の役人が対応をした」という記載がありました。このことについて、生野資料館（生野書院）館長の小椋俊司氏に代官の記録についてお聞きした際に、「オオサンショウウオに関する記録資料が何かありませんか」とお尋ねしたところ「狼についてならありますよ」とお教えいただき、その部分のコピーもいただきました。小椋館長の許可とご指導を得て、生野町のオオカミの記録について、紹介してみたいと思います。

ところで、我が国における狼（ニホンオオカミ）は、明治の初めまで、本州・四国などにかかなりの数が生息していたようですが、その後急減し、明治 38 年（1905 年）奈良県の東吉野村で捕らえられた若雄のニホンオオカミが日本で最後の捕獲の記録となっています。

このニホンオオカミという呼び名は、明治になって付けられたものであり、古来から、ヤマイヌ（豺、山犬）とか、オオカミ（狼）と呼ばれるイヌ科の野生動物で、説話や絵画などに登場してきます。両者は、同じものとされることもありましたが、江戸時代ごろから、別であると明記された文献も現れているようです(Wikipedia 参照)。

生野書院の小椋館長からいただいた資料は、江戸時代、生野銀山が繁盛していた頃のお話です。現代の言い回しにしてみます。

「1798 年 8 月 13 日夜、播州方面から一匹の狼が町に入ってきて、口銀谷の銀番の儀助に喰い付きました。その後、猪野々の買吹幸次郎に喰い付きました。その後、新町平兵衛へ喰い付いた頃は明け方でしたので、隣家の利八が見つけて、狼へなたを打ち込みました。そして（逃げる狼を）町内を追い廻して、坂（現在の新町の入口辺り）の川端で撲殺しました。御代官様が狼を見たいと言って来られたので、人足に狼を持って行かせましたところ、白砂の上に乗せて、元方（元締で代官に次ぐ役職）中沢良右衛門様の立会いで御覧になりました。さらに代官所の御台所（奥方）や長屋の中を持廻ってお見せに成られました。狼が喰い付いた三人のうち、幸次郎と平兵衛は死亡いたしました。」（『銀山記』一第十三輯より）

現在から見れば、実に恐ろしいやり取りですが、かつての日本では中山間部でよく見られた光景だったのでしょうか。それにしても、後で代官様が御覧になりたいということで、持参してお見せになったとのことで、やはり常に見られるものではなく、言わば現在の「ツキノワグマ」と人間の係わりと同じような感覚なのでしょう。

狼については、市川の最上流にある生野町黒川の大明寺という由緒あるお寺の開祖である月庵和尚とのやり取りの話があり、奥藤事務局長が紹介されています。

現在は滅んでしまったニホンオオカミ、そして絶滅に瀕しているオオサンショウウオ、多くさんいるからといって保全の意識が麻痺していると、気が付いたときは・・・なんてことにならないことを願うのみです。

最後になりましたが、生野書院の小椋館長には丁寧なご教示をいただきました。ここに改めて感謝いたします。

ハンザキ研の生き物あれこれ

① サルの出現

ハンザキ研の 3 ㍻程上流にある黒川本村では、春先からサルが現れたという話があった。生野町内の栃原地区は猿害がひどいということで、遅かれ早かれ当地にもやってくると考えられていたが、それがハンザキ研にもやって来たのだ。校内にあるクリの実が食べかけでいくつも捨ててあるのに気がついた。楽しみにしてクリ拾いしていたのにもったいないなと思いながら、今までにないことだったので気になっていた。校庭のカラーフェンスにサルが 2 匹止まっていたという情報を得て、犯人が分ったがなんで食べさしで捨てるのだろうか？ 野生の生き物なのに食べ物を無駄にすることは不可解なことだ。スタッフからまずかったからではという意見、いやうまいクリだよと返事したが、たくさん食べかけで捨てているのはサルの口に合わなかったからなのだろうか？ それから数日後に、目の前の落石防止ネットの上を悠々と歩くオスザルの撮影に成功した。黒川本村ではカキが少々やられたぐらいで、作物には今のところ被害は無いということだ。

② ツリフネソウ

1975 年にハンザキの調査を始めた頃には、水辺の至る所に咲いていた可憐な花だが、最近は全くと言っていいほど姿が見えなくなった。植物に無知な私にとっては花の形からすぐに覚えた名前だったのだ。同じころに覚えたアケボノソウはシカに食べられないのか残っているが、セキショウの群落も食いつくされて“セキショウ帯”とネーミングしていた谷川のポイントにも全く見られない。校庭の南側の山の西半分はスギ・ヒノキの植林であるから下草はほとんどない。東半分は落葉広葉樹林になっているが、ここも臨床に草が見えない。きれいに手入れされていますねと感想を述べた人がいたが、シカに食いつくされているのだ。

先日、川の土手のキノコを見に行った時に、小さな紫色の花が目に入った。ツリフネソウだったのだが、周辺のササ藪の間を探すと背の低い草丈ばかりだったが、結構数多く確認できた。しかし、よく見るとやはり被害を受けているものがあるので、かろうじて残っていることが分かる。数株を校庭の湿地ビオトープへ移植したが、うまく種子ができていればいいのだが、来年の発芽を期待しよう。

③ シカ

奥藤事務局長の休耕田ビオトープに瀬戸市からマコモを頂いて移植したものがたくさんの株を増やして育っていた。ビオトープはネットで守られていたがシカは咬み破って侵入しようとしたようだ。しかし、角を持っていたのが災いして絡まってしまい、逃げようとして暴れまくったためにマコモは見るも無残に踏み砕かれてしまった。やせ細った 3 歳くらいのオスジカは、観念したかのようにうずくまっていたが人の姿を見て再び暴れ出した。処置は猟友会の担当者がバールで頸を打ち脳震盪を起こさせたところで、心臓をナイフでえぐって 5 分ほどでダウンした。見開かれた深い青い眼の色が印象的だった。

今月の調査から

今月は 6 日に岡田さんが調査をして 6 個体を計測した。すべて再捕個体で 7～8 年間の追跡個体ばかりである。それでも 9 回、10 回と再捕回数の多いものも交じっており、特筆されるのは No.911 である。1998 年生まれで 14 歳になっているのだが、簾野の人工巣穴で産み出された卵の内の 1 個体である。7 歳で故郷の簾野において原状復帰させた時の大きさが全長 340 ミリ、468 グラムであった。7 年後に数十センチ程上流で再捕されたが 520 ミリ、980 グラムと大変な成長を示しオスのシンボルも確認できた。今回はその 2 か月後に測定されて 515 ミリ、970 グラムであった。捕獲場所は 1 キロ程上流のハンザキ研の真横である。卵から孵化させて育てた自然を知らないハンザキは野生で生きていけないのではないかと心配の声をたびたび聞く。しかし、この個体だけではなく放流させた個体の成長の良さは抜群なのである。その理由は、餌を十分に食べて瞬発力のある個体は捕食に際して勢いがあるということだと考えている。待ち伏せ型の本種はひたすら待っているのであって、追いかけて捕食する生き物ではない。鼻先にやって来たものに対する瞬間的な大口を開いての吸い込み行動は反射的なものなのだ。追いかけての狩りであれば慣れが必要だろうが、反射作用では十分な体力を持った個体は捕食の確率が高まるのだと思う。多くのハンザキを追いかけていると、捕獲のたびに体重が減少していかにも弱っている様子の個体はやがて姿を見せなくなってしまう。瞬発力の無くなったハンザキは餌を取ることができなくなって痩せていくのだろう。岩国市の錦川水系のハンザキのように人工の障害物のためにやせ細ってしまった個体の一時隔離はやむをえぬことと考えるが、自然の河川での場合には可哀そうだが見過ごしにしておかねばならないことと思う。

13 日には、今年 3 回目の夜間観察会を実施した。そろそろ夜寒の季節だが 40 名ほどの参加者には満足していただけたことと思う。今年も残念ながら人工巣穴で卵を守っている状態を見て頂くことができなかったが、昼間にアンコ淵からの卵をフッキングして水槽に展示しておいたので、これを見て頂いた。夜は 8 個体の計測ができて、すべて再捕個体であった。場所は黒川本村の比較的細い流れの場所であり、岸边からも自然のハンザキの姿をじっくりと見ていただけたと思う。この水域は主調査範囲の中で最も歴史の短い場所だが、前回計測から 7～8 年のブランクがあった個体が 3 匹もいた。それでもトータルの追跡期間が 10 年を超えたのは 2 個体だけで、14 年で 5 ミリ（誤差の内？）と 12 年で 12 グラムという良い成長という対照的な 2 匹である。さらに 4 個体は 7 月の観察会で計測した 2 個体、8 月の観察会でも捕獲された 2 個体のハンザキが再び登場したのだった。

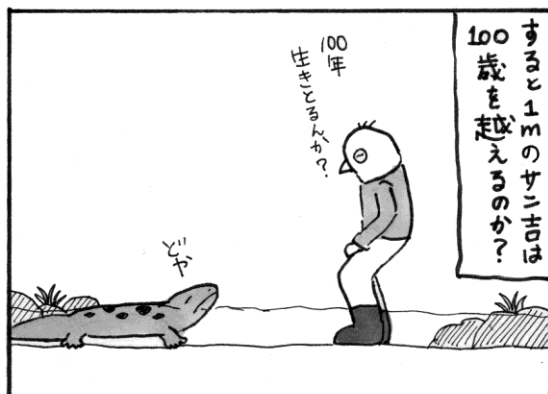
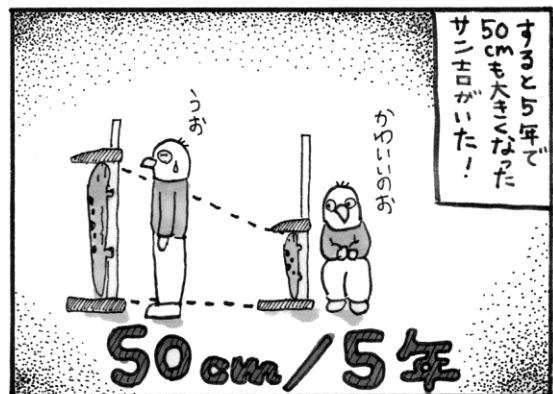
ハンザキは夜行性が強いので彼らに合わせて夜間観察会を実施しなくてはならない。プールの賀茂川ハンザキ達も暗くなると活発な動きを見せるが、やはり自然の河川で自然に出現して待ち伏せの狩りをしている姿を観察できるのは素晴らしいと思う。できれば捕食の瞬間を見せたいのだが、こればかりは人間の忍耐力がどこまで続くかによるところだ。それにしてもハンザキの成長がゆっくりしていること、これが長寿の秘訣かもしれない。



その17 成長



その18 成長2



サン吉: オオサンショウウオ
川にすむ王様である



トリ子: トリ型宇宙人
地球を征服するべくサンの
生命をさがっている

ハンザキ研日誌

2012年10月

- 2 日 アケビー斉開果
- 3 日 ツリフネソウの小群落発見
- 4 日 豊岡市教育委員会から職員 2 名来所
- 5 日 京都市文化財保護課から 3 名来所
- 6 日 ・宍粟市教委・“何でも体験隊” 25 名見学に
・日本工科専門学校生の実習 (岡田副理事長)
- 7 日 ハンザキ研にもサル来襲
- 9 日 円山川水系自然再生推進委員会、豊岡にて
- 11 日 クロコノマチョウ初確認、ペアで飛翔中
- 12 日 須磨水族園の東口さん他来所
- 13 日 ・日本工科専門学校生の実習
・ボランティア作業、アンコ淵の巣穴内部撮影と卵塊フッキング約 300 粒
・ハンザキの夜間観察会 (岡田講師) 参加 40 名
- 14 日 田口勇輝一族 6 名見学に来所
- 16 日 キノコ定期調査 (横山先生他)
- 17 日 留守中に落葉でポンプ止まる (低水位のため)
- 18 日 兵庫県自然環境課・生物多様性ひょうご戦略みなおし会議
- 22 日 アンコ淵からの卵が孵化開始 (9 月 14 日産卵?)
- 25 日 兵庫県立福崎高校へ出前授業
- 26 日 生野中学校 1 年生 36 名見学に
- 27 日 ・小型発電機購入
・奥藤事務局長の水田ビオトープでシカがネットに掛る
- 28 日 事務局会議 10 名出席、ハンザキ研ニュース 78 など発送
- 31 日 ・円山川漁協の福井参事他来所
・山口県錦川のハンザキの件で復建・若宮氏他来所

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

電話をやめました。事務室から宿舎への子機を撤去したのである。さっぱりしましたね。もともとハンザキ研には電話を置かなかったのです。電話は相手側の用事で勝手にかかってくるものです。姫路の自宅には連絡できないというクレームの電話が次々とかかってきて家族からもクレームがきました。しかし、間違い電話やファックス、セールスなど私には関係のない電話が多すぎるのです。スタッフや家族からはケータイによる連絡ができるようになったので、これでいいのです。携帯していないことも多いのですが・・・